

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協同に基づく人類進化学理論の新開拓

第 7 回方法論研究会

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時：2021 年 12 月 22 日（水） 13:00～18:00

場所：ハイブリッド開催（Zoom、AA 研 304 室）

報告者：

- 1) 大村敬一（放送大学）

相互行為素の可能性——霊長類の社会性の種間比較のための試論

- 2) 河合香吏（AA 研）

方法論に関する中間成果本の執筆内容について

3. 内容（発表内容および質疑応答・議論）

3-1) 相互行為素の可能性——霊長類の社会性の種間比較のための試論

（大村敬一）

1 はじめに

「私は最初の調査の直前に、「心の生いたち—社会と行動—」と題する原稿を書きあげ、それを発送して旅路についた。（中略）私は行動の類型化を試みた中で、「社会的な形成と維持にかかわる行動」という一つの類型に注目した。それは要するに、相手を「許す」か「許さぬ」か、あるいは相手に「許される」か「許されぬ」かという背反的な二分律がさまざまなルールに沿って現れた行動群であるといつてよい。それはおそらく、社会構造にもっとも深いかわりあいをもつ行動にちがいない。そしてこのような行動を通じて、社会の規矩をよりダイナミックに捉える方法があるにちがいないと私は考えたのである。」

（伊谷 1982: 220-221）

本書のテーマ、人類を含む霊長類の社会性の進化と起源を探るために、その社会性について異種間をまたいで共通の基盤で調査・研究する方法について考えている最中、伊谷純一郎の「心の生いたち—社会と行動—」(伊谷 1982) という論文と出会って思い出したことがある。それは、文化人類学のフィールドワークで最初に行わねばならない作業の一つ、現地の人びとが話す言語の音素の体系の分析に基づいて彼らのことばを記述するための正書法を設定する作業である。

自分とは異なる生き方によって生み出される世界の現実に迫るために、そうした異質な生き方で生きている人びとのもとに赴き、その人びととともに日常生活を送ることで、彼らの生き方を学ぶ文化人類学のフィールドワーク。その際にまず行わねばならないのは、その人びとが話すことばがわかるようになることである。人類の場合、どんな人びとの相互行為にあっても、ことばが介在している、あるいは、そうであることが前提になっているからである。ことばがわからなければ、そこで人びとが展開している相互行為に参加することはおろか、その相互行為を理解することさえできない。

しかし、そこで話されていることばは、自分にとって未知である場合、ただ音声が続ぎ目なく連なる音楽のようにしか聞こえず、そこにどんな意味があるのか、わからない。そこで、そのことばを理解するためのはじめの一步として、そうして継ぎ目なく聞こえる一連の音声の流れを話している人びとが、その音声の流れをどのように分節し、それぞれに分節された音声の塊にどのようなメッセージを託しているのか、さぐることになる。ただし、人類のことばは、節、文、語、形態素、音素という具合に多重に分節されているので、まずは、それら多重な分節のうち、もっとも基礎的な分節の単位である音素、すなわち、あることばを話している人びとがメッセージを音声に託す際に弁別している最小の音声の単位を析出することからはじめる必要がある。音素より上位の分節単位、形態素や語はすべて、音素の組み合わせからなっているため、音素がわからなければ、それらの分節もわかるようにはならないからである。

ここで重要なのは、そうして音素がわかると、その音素に何らかの記号、たとえばアルファベットや国際音声表記などを割り当て、正書法を設定することで、そこで話されていることばを記述し、そうして記述された多数のことばを比較・分析しつつ、それらのことばが交わされているそれぞれの相互行為やそのコンテキストと照合することで、それらのことばがどのように秩序づけられているのか、それらのことばで何が行われているのか、それらのことばが何を指しているのかなど、そうしたことばによる実践を背後で支えている規則の体系、つまり言語を解析することができるようになることである。そして、そうした解析によってそのことばの規則である言語がわかるようになれば、フィールドワークの現場で話されていることばを理解しつつ、そのことばを使いながら、そこで人びとが展開している相互行為に参加する直接参与観察ができるようになる。ここに、人びとが話している言語の音素の体系の析出に基づいて、そのことばの正書法を設定することが、フィー

ルドワークでの最初の作業の一つとなる理由がある。

こうした音素の体系に基づく正書法の設定にあたる作業が、霊長類の社会性の進化と起源の探究にも、その最初の作業として不可欠ではなかろうか。つまり、霊長類の社会性の進化と起源を探究するためには、人びとがメッセージを交わし合うために弁別している最小の音声の単位である音素のように、霊長類の社会性の相互行為素とでも呼ぶことができるような単位、つまり、さまざまな種の霊長類の社会集団の生成・維持にかかわる最小の相互行為の単位を解析し、その解析に基づいて、霊長類の社会性にかかわる相互行為を記述して比較・分析するための正書法を設定する必要があるのではなかろうか。そして、伊谷が「心の生いたち—社会と行動—」という論文で提示した「社会的な形成と維持にかかわる行動」という霊長類の行動類型、すなわち、「相手を「許す」か「許さぬ」か、あるいは相手に「許される」か「許されぬ」か」という背反的な二分律がさまざまなルールに沿って現れた行動群」(伊谷 1982:220) は、そうした霊長類の社会性の相互行為素を解析するための基盤となるのではなかろうか。

本稿の目的は、伊谷が提示した「社会的な形成と維持にかかわる行動」という行動類型に基づいて、霊長類の社会性の進化と起源を探るために、その社会性にかかわる相互行為について霊長類の異種間をまたいで記述して比較・分析するための方法を考えることである。そのために、本稿ではまず、人類を含む霊長類の社会性の進化と起源を探るために、その社会性について異種間をまたいで共通の基盤で比較・分析するにあたっては、霊長類の社会性にかかわる最小の相互行為の記述の単位を相互行為素として析出する必要があることを示す。そのうえで、伊谷の「社会的な形成と維持にかかわる行動」という行動類型について検討し、その行動類型が霊長類の社会性の相互行為素のヒントとなることを示す。さらに、その相互行為素を実際に使って、私がフィールドワークを行っているイヌイットの社会性を記述することで、その有効性を検討するとともに、相互行為素を使った記述にどのような可能性があるか、考えてみたい。

2 相互行為素：社会性の種間比較分析の基盤

本書がその一部を構成するプロジェクト、「社会性の進化と起源：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」は、人類を含む霊長類のさまざまな種を研究する霊長類学者、文化人類学者、生態人類学者の共同研究によって、霊長類の社会性の進化と起源を探ることを最終目標とする調査・研究プロジェクトである。その目標を達成するためには、まず何よりも、霊長類のそれぞれの種の社会性には、他の種とどのような共通性があり、どのような違いがあるかが明らかにされる必要があるだろう。霊長類の社会性の進化と起源の探究とは、霊長類のそれぞれの種に現在見られる特異な社会性のあり方がどのような社会性のあり方からどのように多様に分岐してきたかを探るということであり、現在の霊長類の社会性の共通点と差異が明らかになっていなければ、その多様な社会性が分岐する以前の起源を推定することも、その起源から現在の多様な社会性が分岐する進化の過

程を推定し、その過程を説明する要因やメカニズムを分析することもできないからである。それでは、現在の霊長類の社会性の共通点と差異を明らかにするには、どうすればよいだろうか。

相互行為素の必要性

この問題を考える際に留意せねばならないことがある。それは、本書の河合論文が示しているように、このプロジェクトで探究される社会性が「複数個体の共存という事態に関連して生じる個体間関係の総体（多くの要素ないし局面からなる複合的な事象の総称）」と定義されていることである。したがって、本書においては、霊長類の多様な種の間における社会性の共通点と差異とは、同種個体間のさまざまな関係を生み出すさまざまな相互行為によって持続的に生成されて反復的に維持される共存のパターンが、霊長類の多様な種の間でどのような共通点を示し、それぞれの種でどのような特異性を示すのかということになる。「複数個体の共存という事態に関連して生じる個体間関係の総体」と言っても、一回的な共存であってはそれぞれの種に特異な共存のあり方とは言えず、持続的、反復的に繰り返される共存のあり方とその例外が、そのパターンとそこからの逸脱として区別されねばならないからである。また、そこで繰り返されて維持される共存のパターンも、その共存に際して生じる同種個体間関係も、本書の河合論文で詳細に論じられているように、その個体間でさまざまな相互行為が展開されることで結果的に生成・維持される動的な過程の産物であるため、どのような相互行為がどのように組織化されることで、そのパターンがどのように生成・維持されるかというその動的過程のメカニズムが明らかにされねばならない。

したがって、霊長類の多様な種の間での社会性の共通点と差異を明らかにするためには、同種個体たちの中でどのような相互行為がどのように組織化され、どのようなメカニズムでどのような共存のパターンが生成・維持されているのかという共通の基準に従って、それぞれの種での社会性が記述される必要があることになる。それぞれの種の同種個体たちが、それら個体たちの中で組織化される相互行為を通して、結果として一定の共存のパターンを示すようになるメカニズムをそれぞれの種での社会性として記述したうえで、そうして記述されたさまざまな種での社会性の諸パターンとそれを生成・維持する諸メカニズムを比較することによって、霊長類の多様な種の間での社会性の共通点と差異を析出するわけである。それでは、その共存のパターンが生成・維持されるメカニズムを記述するには、どうすればよいだろうか。

この際に重要なのは、その記述の最小の単位となるべきなのは、それぞれの個体の行動ではなく、それら同種個体たちの相互行為であり、どんな個体の行動であっても、2 個体以上の間で交わされ合う諸行為と関係づけて記述される必要があることである。社会性が同種個体たちの共存のパターンの生成・維持のメカニズムである以上、個体の行動を単独で記述しても、社会性に迫ることはできないからである。たとえば、「歩く」や「食べる」、「座る」など、たとえ個体が単独で行うことができる行動であっても、その行動を他の個

体の行動と関係づけ、相互行為という一つのまとまりとして記述せねば、その行動をいかに精密に記述しても、個体たちの間の共存のあり方はその記述から漏れてしまい、共存のパターンの生成・維持のメカニズムを記述することにはつながらない。これは、たとえば、ちょうど言語において、発話で展開される音声の流れにどのようなパターンがあり、そのパターンにどのような意味が託されているのかを解析するために、発声される無数の音声メッセージを託される最小の単位としての音素にまとめられて記述されるのと同じである。それと同様に、共存のパターンの生成・維持のメカニズムという社会性を記述するにあたっては、まずは共存のパターンが生成・維持されるメカニズムの最小の単位となる相互行為を特定し、それらの相互行為が組織化されて一定の共存のパターンが生成・維持されるメカニズムを記述する必要がある。

ただし、複数個体間の相互行為であれば、どんな相互行為であっても、そうした共存のパターンの生成・維持のメカニズムを記述する際の最小の単位となるわけではないだろう。これは、多様な音声をただ闇雲にまとめても音素にはならず、たとえば、日本語では[l]音と[r]音は弁別されずに一つの音素としてまとめられるが、イヌイト語ではこれら二つの音声はメッセージの違いを示す異なる二つの音素として弁別されるというように、メッセージが伝達される際に話し手がそのメッセージの違いを示す最小の単位として多様な音声まとめられてはじめて音素が析出されるのと同じである。もちろん、言語の場合とは異なり、社会性の場合には、メッセージの伝達はその機能であるわけではなく、同種個体たちの共存のパターンの生成・維持がその機能であり、どのような相互行為を社会性の記述の最小の単位とするかを決めるにあたっては、その機能に応じた基準に従う必要がある。こうして析出される社会性の記述の最小の単位は、音素にならなれて、相互行為素と呼ぶことができるだろう。それでは、その機能に適した基準で、共存のパターンの生成・維持のメカニズムという社会性を記述するための最小の単位となる相互行為素を特定するためには、どうすればよいのだろうか。

伊谷からのヒント：「社会的な形成と維持にかかわる行動」

この問題を考えるためのヒントとなるのが、本章の冒頭にあげた伊谷の「社会的な形成と維持にかかわる行動」という行動の類型である。共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性は伊谷の云う「社会的な形成と維持」に他ならず、その形成と維持にかかわる一連の諸行動が他の行動類型から分節される際の基準、すなわち、相手を「許す」か「許さぬ」か、あるいは相手に「許される」か「許されぬ」かという基準は、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性を記述するための最小の単位となる相互行為を特定する基準になりうるからである。

伊谷は霊長類の社会構造の成り立ちを理解するためには個体の行動の理解からはじめる必要性を説きつつも、行動主義心理学や行動学、行動分類学など、それまで生物の行動に焦点をあててきた方法論では社会構造の成り立ちを理解するには不十分であるとし、その成り立ちにかかわる行動をすくい上げるための方法論を模索した（伊谷）。その準備的な作

業として、伊谷はフィールド調査に基づく野生霊長類の研究書で霊長類の行動がどのようなことばで記述されているかを検討することで、その多様な行動を記述するための単位を 10 の類型に分類し、霊長類の社会構造の成り立ちを理解するためには、そのうちの第 8 類型である「社会的な形成と維持にかかわる行動」という記述の単位にこそ焦点をあてるべきであるという提案を行った。

その 10 の類型は、伊谷の試論に従って、以下のようにまとめることができる。

(1) アクション：「動く」や「歩く」、「駈ける」、「進む」、「見る」、「食べる」、「飲む」、「到着する」、「移動する」、「現れる」など、社会的に相手の存在を前提にする必要のない個体の運動や状態、動作を区切る単位。

(2) モディファイされたアクション：「見守る」や「見つめる」、「踏みとどまる」、「のぞき込む」など、第 1 の類型の単純なアクションが複雑になり、そのアクションに何らかの限定が加えられて修飾された行動の単位で、第 1 の類型の亜型。

(3) 行動パターン：「プレゼントする」や「マウントする」、「乞う」、「毛づくろいをする」、

「ディスプレイをする」など、社会的な相手を前提にして行われる単一のアクションやその繰り返し、いくつかのアクションの結合から成る動作のまとまりのパターン。

(4) 社会的相互関係あるいは空間的關係：「追う」や「逃げる」、「従う」、「出あう」、「分かれる」、「近接する」、「集まる」、「避ける」、「待つ」、「(相手を) 探す」、「誘う」など、他の個体の動きとの相対的な関係によって社会的意味をもつ個体の動作の一連の繰り返しで、個体間の社会的関係とその空間的布置構造を規定する単位。

(5) 表出的動作：「怒る」や「驚く」、「恐れる」、「喜ぶ」、「悲鳴をあげる」、「ほえる」など、相手に対する個体のフィーリングが表出される一連の表情や動作。

(6) 関与の様態：「争う」や「闘う」、「遊ぶ」、「休息する」、「まとまる」、「移動する」、「泊まる」など、ある特徴をもつ行動を複数の個体が同時に行っており、そこに個体が参与して集団的行動の一端を分有している場合で、相互的な社会的交渉あるいは社会的状態があらわれる行動の単位。

(7) 知的行動：「習う」や「見習う」、「見透かす」、「洞察する」、「記憶する」、「同一視する」、「学ぶ」、「認知する」、「承知する」、「認識をもつ」、「関心をもつ」、「使用する」、「模倣する」など、知的能力の裏づけをもってなされる行動の単位。

(8) 社会的な形成と維持にかかわる行動：「インヒビットする」や「支配する」、「従属する」、「許す」、「許さない」、「大目に見る」、「つつしむ」、「依存する」、「甘える」、「依存される」、「拘束する」、「抑圧する」、「強いる」、「自制する」、「遠慮する」、「制御する」、「和らげる」、「交換する」、「乞う」、「与える」、「誘拐する」、「殺す」など、個体が他の個体の行動系に決定的な影響を及ぼし、それによって集合を構造化させる行動の一群で、相手を「許す」か「許さぬ」か、あるいは相手に「許される」か「許されぬ」という二分律によって複数個体間に規制的に生じる相手への働きかけや態度のパターン。

(9) 言語活動：意識的あるいは無意識に言語を通して行われる行動。

(10) 文化と制度：個体が特定の状況において習慣的に特定のパターンの行動をとり、それが他個体に伝播、伝承されて、その社会のより多くの個体に共通した行動特徴となった場合の行動のパターンで、言語以前の社会では個に対する拘束力をもっていないのが一般的だが、言語以後の社会では拘束力をもつ場合が多い。

これら 10 のタイプのうち、はじめの二つは個体の行動を単独で記述する単位であり、社会的な形成と維持の記述に有効な単位にはならない。その有効な単位となりうるのは個体間の相互行為をひとまとまりにとらえる第 3 類型から第 10 類型までの類型であるが、そのなかでも社会的な形成と維持を記述するための中核となる単位が第 8 の類型である。相手を「許す」か「許さぬ」か、あるいは相手に「許される」か「許されぬ」という二分律によって複数個体間に規制的に生じる相手への働きかけや態度によって、「成員のアイデンティティを明確にし、前記四象限（許す／許さぬ／許される／許されぬ）のけじめをはっきりさせることが、その社会の構造とその維持にとって必須の要件であり、個体の多くの行動はその路線に沿って展開する」（伊谷 1981:151）からである。

そもそも、第 3 類型から第 7 類型のどの相互行為にあっても、複数の個体が相互の行動に対して、相手に「許す」もしくは「許さぬ」ことを示すこと、あるいは、相手から「許される」もしくは「許されぬ」ことを示されることではじめて、相互行為として持続的、反復的に成り立つのであって、第 8 類型を基礎づける二分律が前提として組み込まれていなければ、それら相互行為が繰り返されるパターンとして安定的に維持されることも、社会的な関係を示すこともないだろう。ある相互行為を特定の相手に許し、他の相手に許さない、あるいは、特定の相手から許され、他の相手から許されないからこそ、一定のパターンの相互行為が複数の個体の間で持続的、反復的に繰り返され、そのパターンが個体間の社会的な関係を示すようになるからである。しかも、一見すると単独の行動のようにみえる第 1 類型と第 2 類型の行動も、第 8 類型を基礎づける二分律がそれら行動の前提として組み込まれていれば、複数個体の間の社会関係を示す相互行為となる。たとえば、「食べる」という行動は単独個体の単独の行動のようにみえるが、食べることを特定の相手に許し、他の相手に許さない、あるいは、特定の相手から許され、他の相手から許されないという第 8 類型を基礎づける二分律が前提になっていれば、ある個体の「食べる」という行動は個体間の社会関係を示す相互行為の一部となる。

また、ある一定の社会構造を前提にその維持にかかわる第 9 と第 10 のタイプの相互行為、すなわち言語と文化や制度も、ある特定の社会で通用するルールに従った相互行為であり、ルールは規制の体系である以上、社会の構造とその維持に必須の要件である「許す／許さぬ／許される／許されぬ」という二分律四象限に従った規制が前提になっている。しかも、第 8 類型にまとめられているさまざまな相互行為は、「インヒビットする」や「支配する」、「従属する」、「抑圧する」、「交換する」などに典型的なように、第 1 類型から第

7 種類のいくつかの行動を「許す／許さぬ／許される／許されぬ」結果として生じる相互行為として、それら多様な相互行為の複合体を束ねる単位となっており、第 1 から第 7 類型までの相互行為が第 9 と第 10 の種類の言語と文化や制度に体系的に組織化される際の中間のレベルにあると考えることができる。いずれにしても、社会の構造とその維持にかかわる相互行為、すなわち、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性を基礎づけている相互行為は、「許す／許さぬ／許される／許されぬ」という二分律によって規制されながら持続的、反復的に維持される相互行為であると考えることができる。

相互行為素：社会性の記述の最小の単位

このように伊谷の提案からヒントを得て考えてみると、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性を記述するための最小単位としての相互行為素に適切なのは、第 1 類型から第 7 類型までの多様な相互行為と「許す／許さぬ／許される／許されぬ」という二分律四象限の組み合わせということになるだろう。たとえば、相手（あるいは何か）を「見る（見つめる）ことを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 1 類型と第 2 類型）、相手に食べもの（あるいは何か）を「乞うことを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 3 類型）、相手に「近接することを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 4 類型）、相手に「ほえることを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 5 類型）、相手と「休息することを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 6 類型）、相手に「模倣することを許す／許さぬ／許される／許されぬ」（第 7 類型）という具合である。そして、それぞれの相互行為ごとに、どのように「許す／許さぬ／許される／許されぬ」という四つの相互行為素が現実化されるかを記述すれば、それぞれの相互行為のあり方が生成・維持されるメカニズムを記述することができるだろう。つまり、それぞれの相互行為のあり方が生成・維持されるメカニズムの最小の記述の単位として、「○○すること××××すること」を許す／許さぬ／許される／許されぬ」という四つの相互行為素を設定するのである。たとえば、ある特定の相手に対してどのように（たとえば、相手が近くにいても相手に何もしないことで）「相手に近接することを許す」けれども、別の相手に対してはどのように（たとえば、相手が近くに寄ってくると、繰り返し遠ざかったり追い払ったりすること）「相手に近接することを許さない」か、また同時に、ある特定の相手にはどのように（たとえば、相手に近寄っても、遠ざけられたり追い払われたりされないことで）「相手に近接することを許される」けれども、別の相手にはどのように（たとえば、相手に近寄ると、繰り返し遠ざけられたり追い払われたりされることで）「相手に近接することを許されない」か、という四つの相互行為素の組み合わせによって、複数の個体間で反復的に繰り返される行為のやりとりを記述するのである。そうすることによって、相互の近接性をめぐる共存のパターンが特定の種の個体間で生成・維持されるメカニズムを浮かび上がらせることができるだろう。

そのうえで、そうした近接性をめぐる相互行為をはじめ、伊谷が第 1 類型から第 7 類型に分類した多様な相互行為が組み合わせられて組織化される様子を記述すれば、ある一定の

共存のパターンが特定の種の個体間で生成・維持されるメカニズムを浮かび上がらせることができるだろう。あくまでもたとえにすぎないが、生成・維持のメカニズムが四つの相互行為素の組み合わせによって記述される相互行為は、言語において音素が組み合わせられることで記述される形態素にあたると考えることができる。そして、その形態素を組み合わせることで語や文などが記述されるように、四つの相互行為素によって記述される相互行為を組み合わせることで、それぞれの種ごとに特異な共存のパターンの生成・維持のメカニズムを記述するのである。そのうえで、そうして記述されたメカニズムについて複数の種の間で比較・検討することで、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性が霊長類の間でどのような共通点と差異を示すかを明らかにすることができるだろう。あるいは、ある特定の相互行為、たとえば、相手に「近接することを許す／許さぬ／許される／許されぬ」という相互の近接性をめぐる相互行為に絞って種間比較を行えば、限定された局面をめぐる社会性について霊長類の間での共通点と差異を浮き彫りにすることもできるだろう。

それでは、ここで伊谷の試論をヒントに考案した記述の方法、すなわち、(1)「○○することで××することを許す／許さぬ／許される／許されぬ」というかたちで記述される相互行為素、(2) それら四種の相互行為素の組み合わせで記述される多様な相互行為、(3) それら相互行為の組み合わせで記述される共存のパターンという三つの次元からなる記述の方法が、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性に関する霊長類の種間比較分析に、どこまで有効なのだろうか。それは、この方法を実際に使って霊長類の多様な種の社会性を記述して比較することによって検証されるべき問いであり、本稿の能力を超えている。しかし、霊長類の社会性の種間比較にとって有効かどうかを検証するのは無理であるとしても、ささやかではあるが、この方法を実際に使って霊長類の一つの種である現生人類のごく一部の局面を実験的に記述し、この方法に一つの種の社会性を記述するうえでどのような可能性があるかを検討することは許されるだろう。

そこで、次に、この方法を実際に使って、私が調査・研究を行っているカナダ極北圏の先住狩猟採集民、イヌイトの拡大家族集団という現生人類の共存のパターンの生成・維持のメカニズムの一つを記述することで、この方法の可能性について考えてみたい。

3 対等な共存パターンのメカニズム：イヌイトの拡大家族集団の社会性の記述の可能性

文化人類学者として「社会性の進化と起源」プロジェクトに貢献するためには、まずは現生人類という霊長類の一生物種の社会性の記述を行い、社会性の異種間比較分析の素材を提供することが、私に課される基本的な任務の一つとなるだろう。しかし、現在 70 億以上の個体が全地球上の多様な環境で多様な生活を営んでいる現生人類の社会性にいきなり直接にアプローチすることは不可能である。また、社会性の種間比較に耐える記述の方法について考えることが目的の本稿において当面の課題となるのは、先に提案した記述の方法の妥当性や可能性を検討することであり、現生人類に普遍的にあてはまる社会性を明

らかにするところまでいかなくとも、その一部の人びとの社会性の一局面を実験的に記述することで、その課題に取り組むことはできるだろう。そこで、ここでは、私が調査・研究を行ってきたカナダ極北圏の先住民、イヌイトの社会性の一局面である拡大家族集団の社会性を取り上げ、先に提案した方法でその社会性を記述してみることで、その方法の妥当性や可能性について考えてみることにしたい。

なお、その実験的な記述を通した検討を本稿で行うにあたっては、イヌイトの拡大家族集団が生業システムを通して生成・維持されるメカニズムについて、すでに私がフィールドワークと先行研究に基づいて行った記述を変換して記述し直すという手順を用いる。おそらく、社会性の記述を行うにあたってもっともオーソドックスなのは、実際に人びとが展開する行動をすべて観察して相互行為素を析出し、その相互行為素によって観察された相互行為のすべてを記述したうえで、それら相互行為が組織化されて共存のパターンが生成・維持されるメカニズムを記述するという手順であろう。しかし、そうした手順で記述を行う紙数の余裕は本稿にはなく、また、私はその手順で調査を行ってきたわけでもない。また、そうしたオーソドックスな手順で記述を行わずとも、すでに別の方法で行った記述を本稿で提案した方法に変換し直し、そうして得られた記述を検討することで、その方法の妥当性や可能性について考えることはできるだろう。

むしろ、ここで行う記述の手順、すなわち、既存の記述を本稿で提案する方法での記述に変換する手順は、共存のパターンの生成・維持のメカニズムとしての社会性に何らかのかたちでかかわる記述がすでに無数の民族誌や研究論文のかたちで積み上げられてきた今日の状況にあっては、オーソドックスな手順に従ってはじめから観察と記述を行うよりも現実的で生産的であろう。もちろん、既存の記述は必ずしも本書で云うところの社会性を主題にしているわけではないため、そうした手順で変換するだけでは社会性について十全な記述にはならないことも多いに違いない。しかし、そうした場合にあっては、既存の記述を変換した後に、その変換では社会性の記述に不十分である部分についてあらためて調査を行うことで補完することができるだろう。

それでは、既存の記述を先に提案した方法に従って変換すると、どのような記述が得られ、その記述には社会性の異種間比較分析の素材としてどのような可能性があるのだろうか。この問題について具体的に検討するために、イヌイトの拡大家族集団が生業システムを通して生成・維持されるメカニズムについて私が行った記述を先に提案した記述の方法に変換することからはじめたい。

イヌイトの生業システム：拡大家族集団の生成と維持のメカニズム

私はフィールドワークと過去の民族誌に基づいて、イヌイトの生活世界が生業システムによって生成・維持されるメカニズムについて記述を行ってきた (cf 大村)。生業システムとは、実現すべき世界として表象された世界観によって律せられる食料の獲得・分配・消費の過程を通して、イヌイトと野生動物を関係づけつつイヌイト同士を拡大家族集団にまとめあげ、「大地」(nuna) と呼ばれるイヌイトの世界を持続的に生成するシステムのこと

である。この生業システムがイヌイトの世界とそこに埋め込まれた拡大家族集団を持続的に産出するメカニズムは、次のような循環システムとして記述することができる (大村 2009; 2012)。

まず、イヌイトが狩猟・漁労・罨猟・採集の生業技術によって動物の個体と「食べ物の贈り手／受け手」という関係に入ると同時に、その結果として手に入れた食べ物などの生活資源をイヌイトの間で分かち合うことで、イヌイトの日常的な社会関係の基礎となる拡大家族集団が生成される。このときに重要なのは、イヌイトが実現すべき世界を示す世界観では、生業で実現されるべきイヌイトと動物の関係として、次のような互惠の関係が目指されるため、食べ物を分かち合うことがイヌイトの間で規範化されることである。

イヌイトの世界観では、動物は「魂」(tarniq) をもち、身体が減んでもその魂が減びることではないとされる。ただし、この動物の魂は、イヌイトがその身体を分かち合って食べ尽くさねば、新たな身体に再生することはできない。そのため、動物の魂は新たな身体に再生するために、自らの身体をイヌイトの間で分かち合われるべき食べ物としてイヌイトに与えることになる。このことは、イヌイトからみれば、生存のための資源が与えられることになるので、イヌイトは動物から助けられることになる。つまり、イヌイトが実現すべき世界においては、動物はイヌイトに自らの身体を食べ物として与えることでイヌイトの生存を助け、イヌイトはその食べ物を自分たちの間で分かち合うことで動物が新たな身体に再生するのを助ける、という互惠的な関係が目指されることになる。

こうした世界観によって示される指針の結果、イヌイトは動物に対して常に「食べ物の受け手」という劣位にある者として、動物から与えられた食べ物を自分たちの間で常に分かち合わねばならないことになり、イヌイトの間での分かち合いが規範化される。イヌイトの間で食べ物が分かち合わねば、動物の魂は再生することができなくなるため、動物はイヌイトに自らを食べ物として与えなくなってしまうからである。このとき重要なのは、イヌイトに分かち合いの規範を課すのは動物であって、イヌイトではないように工夫されていることである。そのため、イヌイトの間では、誰が誰に対しても命令することなく、誰もが同じ規範に従って食べ物を分かち合う協調の関係が成立する。

こうしてイヌイトの間では、平等な食べ物の分かち合いの中で、相手を裏切って食べ物を横取りしないことを相互に期待し合い、食べるという同じ行為を協調して行うという相互の意志に依存し合う信頼の関係が生じる。結果として、イヌイトは動物に対して「食べ物の受け手」として常に劣位な立場に立ち、食べ物の分かち合いの規範を課す命令を動物に託してしまうことで、自分たちの間から「支配／従属」の関係を厄介払いし、自分たちの間に平等な立場で協調し合う信頼の実現することになる。

しかし、この代償としてイヌイトには動物を馴化する道が閉ざされる。もしイヌイトが動物を馴化してしまえば、分かち合いの規範をイヌイトに課すのは動物ではなく、その動物を馴化したイヌイトということになってしまう。これではイヌイトがイヌイトに命令していることになり、厄介払いしたはずの「支配／従属」の関係がイヌイトの間に舞い戻って

きてしまう。イヌイトの間で対等な信頼の関係が成立するためには、動物はイヌイトの誰に対しても優位な立場にあらねばならない。結果として、イヌイトは動物に対して支配と管理に繋がるような方法、例えば牧畜を採用することはできなくなり、相手に従属する弱者の立場から相手に働きかける誘惑の技、つまり弱者の技である戦術を駆使する狩猟や漁労、罟猟、採集に徹することになる。

さらに、この分かち合いの規範化は、食べ物の分かち合いだけでなく、生業のための技術や知識の分かち合いと協働を促す。この規範化によって、イヌイトの間では生業活動の結果として入手される食べ物が常に分かち合わねばならなくなるため、横取りや裏切りを心配することなく、生業活動で協働することが可能になる。むしろ、生業の結果として得られる食べ物を独り占めすることができず、常に分かち合わねばならないのであれば、狩猟や漁労を単独で行ったり、技術や知識を独占したりすることに積極的な意味がなくなり、技術や知識を共有して協働することに積極的な意味がでてくる。

このように共有と協働が当たり前のことになると、その共有と協働を通して、生業のための知識と技術は豊かに錬磨されてゆき、その結果、イヌイトが新たな動物の個体との間に「食べ物の受け手にして分かち合いの命令の受諾者／食べ物の与え手にして分かち合いの命令者」という関係に再び入る確率が上がる。そして、この関係が実際に実現されると、すべてが生業の出発点に戻り、もう一度、同じ循環が繰り返される。こうして動物の魂の新たな身体への再生は、イヌイトの世界観にあるように、循環する生業の過程の中でイヌイトと動物の関係が再生産されるというかたちで実現される。死滅することなく再生する動物の「魂」とは、イヌイトと動物の関係をことを指しているのである。

こうしてイヌイトと動物の間の「誘惑／命令」の関係が、イヌイト同士の「信頼と協働」の関係と絡み合いながら循環してゆくと、イヌイトにとって「信頼して協働すべき者」としての「イヌイト（の拡大家族）」と「誘惑する対象にして、その命令に従うべき者」としての「動物」が差異化されて浮かび上がってくる。もちろん、この循環過程で生成されて更新されてゆく動物との関係は、一種類の動物種に限られるわけではなく、様々な動物種との間に結ばれる。そのため、イヌイトの拡大家族は、生業の実践を通して複数の動物種と循環的に生成される諸関係の結節点に生成され、様々な動物の群れの結節点が無数に相互連結したネットワークの中に、その結節点の一つとして溶け込みつつ浮かび上がることになる。このネットワークこそ、「大地」(nuna) と呼ばれるイヌイトの世界である。

イヌイトの拡大家族集団の社会性：対等な共存パターンの生成・維持のメカニズム

こうした生業システムのメカニズムを先に検討した社会性の記述の方法に照らし合わせてみると、イヌイトの拡大家族集団の社会性についてすぐに気がつくことがある。それは、イヌイトの拡大家族集団の社会性では、イヌイトという同種個体たちの間で展開される二つの相互行為、すなわち、(1) 食べものの分かち合いという相互行為と (2) 知識や技術の共有を含め、狩猟・漁労・罟猟・採集から成る生業活動で協働するという相互行為が循環的に組み合わせられることで、相互に対等な信頼の関係という共存のパターンが持続的

に生成・維持されるが、その共存のパターンを構成する二つの相互行為においては、イヌイットの同種個体たちのなかに相手の行為を「許す／許さぬ」主体が存在しないように工夫されていることである。

質疑応答・議論：

(相互行為と言説)

- ブッシュマンの例では、誰もが肉を分配する立場になれることで、分配するものとされるものという支配従属関係を流動化させ平等主義が構築される。イヌイットの場合は、人間同士の関係だけでなく、人間と動物の関係も関わっているように感じるが、実際にイヌイットの間での分配はどのように行われているのか。また、言説と相互行為の関連についても教えてほしい。
- イヌイットの場合は分配する人がおらず、共食を行う。分配すると貸し借りの負い目が出てくるのでひたすらそれを避けるという方法をとる。また、「獲物を自分で独占して人に配ったりしたら、二度とあなたのところには寄らないぞ」と動物から脅されるという言説は、ハンターによる独り占めを抑止する効果がある。こういった方法の他に、主に子供のころに相互行為を通したやり取りによって独り占めが抑制される等、単に一つの方法ではなくいくつかの方法を使って独り占めに対する抑制が起きている。

(相互行為素・分析基準の提案)

- 許す/許さぬ/許される/許されぬというのは相互行為素ではなく、もう少しメタなレベルでの切り分けのように思う。
- 相互行為素はメタレベルであると考えている。メタレベルの問題が入っていないと社会性につながらないと思っている。
- 許すとか許されるということと無関係に、誰かと何かを一緒にするということがあるのではないだろうか。
- 重要なのは外部観察の視点なので、本人がどう考えているかは問題ではなく、誰かと何かを一緒にすることを許されていると考えればいい、というレベルで考えている。本人の本当の考えは分からないが、そのように振るまっている、という視点で見たい。
- 現れている行動から分かることを取り上げようということだと理解している。霊長類研究者が行動に着目するしかないと言っているのと同じ土俵に立とうとしていると考えたらいいのか。
- 人類学者も、相手は何を考えているのか分からないので、そう考えざるを得ない。今重要なのは基準となる枠を作ることなので、ファジー理論ではなく、間がないバイナリーなものを考えるのがいいのではないかと思う。

- 四象限だけではうまくいかないことは、態度が変化することがあるなど、通時的に考えればわかる。この四象限だけで長期的な行動を分けてしまうのは無理があるように思う。
→もちろん指摘の通りであるが、今重要なのは、枠組みを作りその枠の中でどう考えていくかということである。

(分析基準の検討)

- 社会性を明らかにするのに適切な記述と分析の単位は行動ではなく相互行為だという主張には賛同する。ただ言語とのアナロジーで相互行為素を音素のアナロジーにしているのは少しわかりにくい。直観的には音素に対応するのは動作（モーション）みたいなもので、相互行為に対応するのはシニフィアンみたいなものではないか。
- 相互行為素は言葉との対応であって、音素ではないと思う。連続した動作を分節化するのは言葉であって、観察から行為素を抽出できるとすると音素とは違うのではないかと思う。
- 音素は単位として小さすぎるように思うので、相互行為に対応するものを言語側のアナロジーとして出した方が分かりやすい。
→音素をアナロジーに使ったのはあくまで例えであるが、音素は基本的にそれ自体では意味がないのでシニフィアンとは言えず、形態素が相当するということだと思う。モーションは四象限の考え方が含まれていることが重要で、「歩く」では不十分で、「～することで歩くことを許す」という意味であればいいのではないかと思う。
- 伊谷（1981）の類型は文法レベルで単語を扱っている一方、許す/許さないというのは単語のレベルを超えて、socio-linguistic なレベルになっていく。霊長類研究者も行動を切り分けて解釈するので、音を切り分けて解釈するという発想はアナロジーとしては成立すると思う。ただし、言葉は人間同士が作る単位であるが、霊長類の観察の場合は観察者が勝手に作った単位である点が大きく違う。その点は踏まえていないといけない。
- 霊長類の研究者としては、言葉が分からない長い演説を初めて聞いた時や、言葉が分かりつつある時に、演説の単位やその場における社会的な運びの切り分けをどのように解釈しているのかを説明してもらえると、示唆的なものが得られるのではないか。
- 霊長類の研究において人間側から行為を切り分けるしかないという問題は、人類学における研究者と対象の相手で切り分け方が違うという問題に通じる。イヌイトの人たちが実際にどういう風に自らの行為を切り分けているのかということは私たちには分からないし、分かったとしても既存の私たちの言葉では表現しきれないという問題がある。
→相手が何を考えているのかということは、結局は分からないし、許す/許さぬというのは通常は現れない。例えば、動物の場合は遊びをするときにこれは遊びだという指標が現れるが、人間の場合はそれが非常に分かりづらいという特徴がある。そこで、共存のパターンという外部から観察できる事実という社会性の定義に従うと、現実には彼らがどう考えているのかはあまり考えなくていいということを強調したい。許すような行動をとった

のか、許されないような行動をとったのかということが重要で、内面として許しているとか許されているとかということは問題ではないと思う。許されないようなことをした場合も、何もされないという形で行為が接続されないので、分かるはずである。

- 社会的な外部規範から逸脱したときに社会規範や共存を可能とするメカニズムが明らかになるだろうし、それが繰り返されることで社会化が進んだり内在化したりするということにつながるのではないか。その点では子供の社会関係に注目してみてもどうか。

→何を中心にしようかということに迷いはある。生業システムを取り上げているのは、許す/許さないの主体にならないようにしている、という点を強調しようと思ったからである。

→社会システムは生業システムだけでは成り立たず、子供の躰など複数の仕組みがある。許す/許さないということを分析上の一つの基準としたときに、人間側でいえることとサル側でいえることを挙げるだけでも様々な議論ができると思う。

3-2) 方法論に関する中間成果本の執筆内容について

(河合香吏)

中間成果本の執筆者：

論文：大村、竹ノ下、河合

コメント：森下・川添、曾我・中村、杉山・スプレイグ

(仮題)

人類学と霊長類学の協働はどのように可能か：研究の全プロセスで協働することにむけて
・行動への着目：「行動」を調査し、分析・記述し、考察する方法の可能性

1. はじめに：経緯と課題

(1) 経緯

AA 研の共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究」(「集団」「制度」「他者」「極限」)

サル屋とヒト屋の共同研究会 (年間 5 回程度)

→AA 研の財政逼迫により研究会が 2 回しか開けなくなった→科研申請に

「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化学理論の新開拓」

(1) フィールド、(2) 研究会、(3) 成果公開を三本柱

「人類学と霊長類学の協働」をいかに達成していくか

協働のための方法論の開拓を重要な課題と位置づけ→方法論研究会

(2) 課題

人類学と霊長類学の協働 [直接的課題]

社会性の起原と進化 (人類進化理論の開拓) [最終的課題]

* 研究の全プロセスで協働

(計画調書)「同じ調査法を用いてデータ収集をし、同じ概念を用いて議論することが肝要」

「たとえば個体追跡法から開始してみる」←「調査法の確立が期待される」

個体追跡法にはすぐに否定

「実質的に無理」「調査法を同じにすることを考えるのはナンセンス」

全プロセス：フィールド（含、調査計画）、データ収集、集計、解析法の選択、**解析結果の提示、考察、結論**、理論構築という一連の過程。お互いのやり方を知る。

前プロジェクトでは出来上がった作品(?)をめぐって議論

「知見を得る」→ 十分な比較研究、「協働」

「共通の方法」は無理がある・・・

→サル屋とヒト屋で異なることを認め、これを前提に、互いの調査・研究方法の詳細、短所長所も知った上で議論、理論構築へ。

→概念の共有、すりあわせ、記述の問題（記録から記述へ）

サル屋に生物学的な分析/考察をやめろと言いたいのではないし、ヒト屋に言葉による調査をやめて定量データをせっせと集めろと言いたいわけでもない。

・生物学的存在としての側面をあきらかにすることで終わりにせず、アルゴリズムと「経験する主体」の＜あいだ＞（田辺/竹ノ下）

・ヒトの生物学的側面、生態系の一部としてのヒト、進化の隣人である霊長類たちとのつながりを前提として分析や考察をすることも（cf. 生態人類学）

ただし、人間行動学（Human ethology）、生物学的還元ではなく

2. 人類学と霊長類学の協働

(1) 進化という文脈

サル屋とヒト屋の協働により、異種間比較をし、社会性について、種の違いを超えて、より普遍的な視点から理解

* 人間はどこから来て、何者であり、どこへ向かうのか (人類学の究極課題)

「進化」という視点、文脈：霊長類の一員としてのヒト、進化の賜物→霊長類学との協働

ex. 「人類社会の進化史的基盤研究」プロジェクトで真っ先にテーマとしたのは「集団」

ドドスの集団間関係をどのように理解したらよいのか、困り果てていた。

そもそも何故ヒトは集団を作る (=集まる) のか

「そもそも」→ 進化的視点。霊長類との比較、進化的基盤を探ることから開始

進化の隣人に学ぶことは多い

生物学的還元に限らず、だがヒトが霊長類の一員であるという生物学的 (進化的) 事実

(2) 伊谷純一郎の「直観」

「人間平等起原論」(伊谷 1986)

——ニホンザルから類人猿へ、類人猿から狩猟採集民へ、そして焼畑農耕民や遊牧民などの自然に強く依存して生きる人びとへというのが、私がこの三十数年歩んできた道であった。私はよく、あなたの霊長類学と生態人類学はどうつながるのかと問われたが、人類社会の進化を論じようとするとき、この二つの領域は必須の分野であり、野生の霊長類と自然人はかけがえのない所与であると答えてきた。その両者を貫く理論が先にあってというのではなく、進化がそれを繋ぐはずだという直観への共鳴に依って、そういう意味で対象に魅せられて、これまでの歩みを続けてきたと言ったほうがよいように思う。

理論的背景として、「なぜサルとヒトの協働か」の問いにこたえる

でもその方法論は確立されているわけではない

伊谷の「直観」をかたちにしたい

* 『サルの文化誌』(西田・伊沢・加納編 1991)・『ヒトの自然誌』(田中・掛谷編 1991)

…サル屋とヒト屋の歩み寄りを志向？

(3) ヒトを見るようにサルを見、サルを見るようにヒトを見る

この言い回しがどこから来たのか、記憶があいまい

私にとって人類学の基本であり続けてきた…「みかた」(方法、視線、姿勢、態度)

「ヒトを見るようにサルを見る」：霊長類社会研究の黎明期、初期から？

→サルの社会にはいりこんで、ヒトの社会を見るようにサルの社会を見よ（今西さん）

「サルを見るようにヒトを見る」：「おまえ、それみたんか？」「言葉（だけ）に頼るな」

自分の目で見て確認していないことは信憑性に欠ける（データとして劣る？）

→言葉を使った調査ができないサル屋さんとの共通の基盤に立つ方途

「サルを見るようにヒトを見る」、そのうえで「擬人法」を使うかのように記述→冷たい？

霊長類学者の方がもっと「あたたかい」？・・・「共感法」（河合 1989）

冷徹な客観的観察（可能かどうかは別問題）→「サルを見るように・・・」はその端的な表現

3. 行動への着目

サル屋は「行動しかみることはできない」「サルにインタビューはできない」という。

ヒト屋は「インタビューやヒヤリングをそのまま信じているわけではない」という。

・・・→何を根拠に他者の経験のリアリティに接近するのだろうか？

サル屋がサル（の経験）を理解する方法と根本的、本質的に違うのか。

* 行動から社会を見る

みちびきの書として・・・（第 4 回方法論研究会）

・伊谷（1981）「心の生い立ち」

・伊谷（1982）「行動人類学試論」『大早魃：トゥルカナ日記』

とくに「心の生い立ち」の第 8 類型「社会的な形成と維持にかかわる語」

+ 第 6 類型「関与の状態をあらわす語」

言説データを排除しないが、言語化された制度や観念だけでなく、自己や他者の行為、実践への言及に着目

——性と生殖に関して私がチャムス社会で目の当たりにしたのは、それを徹底的に言語化し、理論を作りあげ、そしてそうした観念から語り、**行動**する人々の姿であり、またそうした**行動**によっていくつもの側面が浮き彫りにされていく**社会**の姿である。性と生殖に関する知識そのものの内容や「正しさ」について論じることよりも、私はこうした人々の**行動と社会**の、実際の姿をとにかくも**記述**することからはじめたいと思った。（河合 1994）

全プロセスでの協働を念頭に、行動に関する「比較に堪えうる」データ、分析、記述・・・はいかに可能か？

(1) 観察と記録

調査（観察と記録）の方法の相違

- ・サル屋の野外調査：直接観察。データは「行動」（相互行為を含む）。
- ・ヒト屋の現地/臨地調査：直接観察、参与観察、聞き取り。データは「行動」と「語り」
 - *生態人類では+計量、計測。 cf.「生態人類学原理主義バネばかり派」
 - *生態学的参与観察（黒田 2002）：サルについて歩き、サルのすることを同じように行う。サルの経験をなぞる行為であり、サルの経験に近づく方法。

ヒト屋の方法のすべてを調査で用いてきたが、心がけてきたのは「行動」への着目。

個体追跡っぽいこともしてきた（もちろん限界あり）。

「1 頭の個体を追跡し、その個体の行動や状態、その個体の周囲で起きる事象すべてを記録」

ヒト相手では不可？

→性行動など「追跡」できない領域はあるが、言説で辿ることで補うことが可能な場合もある（cf.チャムスの性と生殖）。

聞き取りはできるだけ多くの人に（同じことを）聞く。多くの人びとが集まっている場で聞き取り調査をする。意見の対立もあるが、それもふくめてデータとなる。

人びとが自発的に語ることに耳を傾ける。

* 定点観測的な調査をする人もいる。キャンプで椅子に座ってただ待つ。

森下さん：調査の方法次第で「スパイ」の疑いをかけられ関係悪化。調査ができなくなった。

大村さん：「手伝い（仕事）」をしなければならないからノートをとる余裕がない。

→その意味では私はあまり苦労しなかった。個体追跡っぽいことも大きな問題なくできた。

・もちろんレイディングにはついていけないし、出陣前の作戦会議も遠巻きにしか観察できなかった。

・放牧にも毎日ついて行っていたが、「巻かれた」こともある。

→私がしたいこと知りたいことを理解し、それを許してもらい、受け入れてもらえた瞬間。

* 人類生態学や栄養生態学では GPS を使ったデータ収集や個体追跡法も試行。

住民の理解・納得・許容が必要。調査の実施前に「慣れ」てもらうために何カ月も費やす。

→霊長類学の「ヒト付け」に似ているかも

計量・計測データ：

数値を示してくれない/示すことができないことも多い

→数値化できるものはできる限り定量データを集めるように努める

*たとえば家畜の数勘定のための調査は家畜をめぐる他の情報を副次的にもたらすことも。

* 計るための操作的定義の問題 ex.早木さんの「遊び」の研究、バウトとセッション

データの提示・分析：

定量データを統計的分析、事例データを質的分析 →データは違っていても可

どのような文脈で理解しようとしているかを反映？

文脈の乖離は深刻で互いの成果を「参照」できても協働は困難？ →記述レベルで比較

行動レベルで比較するために、ヒト屋も行動を観察し、記録する努力をして歩み寄れないか。

行動から社会を見る（「心の生い立ち」「行動人類学試論」：上述）

×人間行動学 (Human Ethology)、個体中心主義、社会はわからない

人類生態学 (Human ecology)：物質とエネルギーの循環として理解するだけなら×

→深化のために進化の視点？

『生態人類学会は挑む SESSION-5 関わる・認める』（河合香吏編 2022）

・山内（2022）の人類生態学的研究：育児と子どもの狩猟活動

・夏原（2022）の栄養生態学的研究：子どものフードシェアリング。栄養生態学的な検証に留まらず、人類社会の進化における共同育児仮説を指示するデータとして考察。

(2) 擬人法/擬人的表現

サル学の黎明期、初期には、伊谷さんの『高崎山のサル』、河合雅雄さんの「共感法」、今西さんの「類推」・・・だが、非科学的と批判されて、自然科学としての霊長類学では否定的、避けられてきたと思っていた（アスキス 1984）。ところが・・・

大塚柳太郎編『生態人類学は挑む SESSION-1 動く・集まる』

———— K 集団に最後まで残っていたマシサという若いオスが事態に対処できぬまま痩せこけ、M 集団が発する音声をおびえながら私が与えたサトウキビをかじっていた様を思い出すと、彼にとって「動く」＝「次のチャンスをつかむ可能性を目指す」こと自体がもはや望めず、座して死を待つ結果に流されていったという感慨を覚えるのである。そこには“動けない者”に対する苛酷な運命を感じてしまう。（高畑 2021：151）

*「感じとった以上、何らかのメッセージをもたらしてくれる」（高畑 1994、竹ノ下 2009）

『関わる・認める』：社会的な事象に関わる論文を集めた 10 章。若手のサル屋さん 4 人。

詳細な客観的データを提示した上で、擬人的な表現を用いる。

▶岩田（2022）

「全体の努力と個体の努力：群れはいかに維持されるのか」

調査対象のニシゴリラ、20 頭を超える大きな群れ。集団として維持されるためには、食物競争を抑える何らかのメカニズムが働いているはず。そのメカニズムを果実量の季節変動と遊動のあり方、および採食時の各個体の振る舞いの二側面から分析、考察。

群れの凝集性を維持するには、(1) 群れとしては果実期に遊動距離を延ばし、遊動域を広げながらも、果実が集中する場所を繰り返し利用することで、群れ内のスクランブルを減少させる [全体の努力]、一方で (2) 個体同士が距離を保ち、また年少の個体が樹上から地上の年長個体へ食物を落とすことで、コンテストを避けていた [個体の努力]。

————— 樹上のゴリラが(故意ではなく)落とした食物を、偶然、その下にいた個体が食べているのであろうと考えていた。しかし、一回の観察が筆者の認識を変えた。…樹下に個体がいなくなると、イチジクの果実が落ちてこなくなった。再び、個体がイチジクの木の下に来て座り、上を見上げる。すると、イチジクの実が再び落ち始める。下線部の観察から、私は樹上の個体が樹下の個体にイチジクの果実を落としていたことを確信した。

豊富な生態学的なデータ、行動学的なデータを用いて、スクランブルの減少とコンテストの回避について説得力のある記述がされている。その分析結果をヒガシゴリラと比較したり、他の霊長類種やヒトとの比較を通じて、進化論的な位置づけもしている。霊長類学の論文として十分に完結しているが、「努力」という言葉で総括。

▶座馬 (2022)

「離合集散が織りなす集団の動態：ヒトとチンパンジーの社会にみる概日性多相集団」

豊富な観察事例を主たるデータとした論文。チンパンジーの離合集散と小集団 (パーティ) の形成過程を個体追跡法 (ほぼ丸 1 日追跡) を用いながら詳細に描出。

【事例 3：発情したメスとオスがつくる小集団】

PF は大人オス (IH、MC、DW) に関心を持っていたようだが、MC を「本命」としていたように感じられた。そのように感じた理由として、他のオスよりも長く MC と行動をとみにしていた点や、PF、PC、MC の 3 頭だけで小集団を作っていた時間があった点が挙げられるが、そうした「結果」がわかる前から、MC を「本命」としているという印象を私はもっていた。それは昼下がりにみられた次の行動に強く印象づけられたからである。

<13 時 16 分から翌朝 8 時 10 分まで夜を挟んで、分刻みの詳細な行動観察データが続く>

【事例 4：発情していないメスとオスが 2 頭で作る小集団】

12 時 45 分から 14 時 38 分にかけて、私は大人のメスやオス、子どもたちからなる 11 頭の集団を観察していた。その後、その集団の観察をやめて周辺を探索し、15 時 29 分、先ほどの集団から東に 200m ほど離れた場所で FN がイロンボの実を採食しているのを発見し、観察を開始した。FN は採食後、木の上で横になっていたが、15 時 57 分に移動を開始すると、CY が現れた。

CY が FN に挨拶をしながら接近すると、FN は CY に毛づくろいを開始した。FN が毛づくろいをしている最中、CY が移動を始めた。そのため毛づくろいは終わったが、FN は CY について歩き、CY が止まると毛づくろいを再開した。その毛づくろいの最中に CY がまた移動した。

16 時 05 分、CY と FN は互いに異なる方向に移動しようとしたが、FN が小さく「フフ」と声を出すと、CY は FN のいる方へ歩き始めた。歩いている途中、CY は FN を追い抜いて先を歩いたが、後ろを歩いていた FN が横の藪の方に入っていくと、CY も FN を追って藪に入った。

この 15 時 57 分に FN が CY と出会ってから 16 時 05 分までの 8 分間の観察で、私は「コンソート（オスとメスが 2 頭だけで長期間、他の個体から離れて過ごす）のはじまり」を観察しているのではないかと感じ、そのことをノートに書き留めた。私がコンソートの開始を見るのは初めてのことだった。挨拶や毛づくろい、移動など、ひとつひとつの行動はコンソートにしかみられない行動とはいえず、「コンソートのはじまり」と分かるような明示的な行動はなかった。それなのになぜ私はそう思ったのだろう。それは 2 頭のやりとり「駆け引き」のような要素があるのを見て、そこに「男女の機微」のような雰囲気を感じたからかもしれない。「毛づくろいの最中に移動する」ことは、毛づくろいをしている FN にとってはちょっとした嫌がらせかもしれない。だがそんなことをする CY に、FN は再び毛づくろいをする。また FN が行きたいと示した方向に歩いていたはずなのに、後ろを歩く FN が方向を変えて藪の方に進むというのは、CY にとってちょっとした嫌がらせかもしれない。しかしそんな FN に、CY はついていく。そういった 2 頭の行動の連鎖に「駆け引き」を読み取り、コンソートを予感したのだろう。

この続きの観察でも、独特な雰囲気を醸し出す 2 頭の行動が見られた。

< 分刻みの詳細な行動観察データが続く >

…CY と FN の 2 頭が作る小集団は、事例 3 の PF と MC らが作る小集団と「雰囲気」が違っていた。PF は MC に対して力強い発声をしており、相手の関心の引き方に強引さが見られた。一方で CY と FN は互いに静かな発声をしており、相手の関心の引き方に細やかなやりとりが見られた。この違いは、集団を作る目的の違いによるものかもしれない。…CY と FN は、2 頭の小集団でこのあと何日も過ごすことを目的としており、あえて擬人的に言うならば、「私はあなたと長く快適に過ごすのに適していますよ。毛づくろいもしますし、発声だって合わせられますよ」といったことを互いに認め合うやりとりが生じていたのかも

しれない。

ただ、コンソート中の 2 頭がいつも穏やかなやりとりをするとは限らない。たとえばコンソート中のメスが別の小集団の声を聞いてそちらに向かおうとしたときに、オスがメスに向かって蔓をゆすったり地面をたたくなど、威嚇するようにして移動を制御した事例もある (西田 1981)。しかし FN はそういったそぶりを見せることはなく、CY と穏やかな発声のやりとりをしたり、移動の駆け引きなどをしていた。西田は、発情したメスに目をやるオスのチンパンジーの様子についてこう記している。「私が計てみると、一分間に、九回、六回、五回、六回、五回、五回、三回と視線を投げる。そのうち、他人の恋路をのぞいているような気がして、厭気がさし、私は計るのをやめてしまった (西田 1981: 87-88)」。チンパンジーのオスとメスの関係を「恋」と呼ぶかどうかは議論があるだろうが、こうしたちょっとした仕草を丁寧に記載することで「恋」というものが見えてくるのかもしれない。私たちの生活の中でも、ちょっとした仕草で恋愛感情をもつ 2 人に気づくことがある。それと同じように、毛づくろいされているのに移動する CY の動きや、発声の同調、不自然な体勢の毛づくろいなど、ちょっとした動作に私はチンパンジーの「恋」の駆け引きを読み取り、コンソートの始まりを確信していたのかもしれない。

* 岩田、座馬の記述には、行動の記述として客観的、ニュートラルな表現・言葉を用いて詳細な観察記録を提示したうえで、解釈 (分析、考察) に擬人的な表現を使うという共通点。

終章で擬人的表現にふれた (河合 2022)。

——— 霊長類社会を対象とした各章において、サルたちの行動に関する事例の分析や考察に、しばしば擬人的な言葉が使われていることに気づいた読者は少なくないだろう。観察において目にみえるのはサルたちの行動だけである。擬人的な表現は主体の意図や意識を推しはかった記述であり、サルたちが自己の行為について何も語らない以上、それはあくまでも観察者の感情移入を反映した勝手な思い込みであるとの排りを免れ得ない。だが、たとえば 4 章で岩田がキーワードとして用いた「努力」、あるいは 8 章で座馬が「擬人主義的な言い方になるが」と断りつつもその記述に散見される擬人的な表現は、「勝手な思い込み」を遙かにこえた対象の正確な理解に裏づけられているように思われる。

冷徹な客観的観察に基づく微細で詳細な行動データを提示したうえで、その分析や考察の内容を、フィールドで感得された「わかった」という経験にも立脚しつつ、適切な言葉を用いて伝えるために、あえて擬人的な表現を使うことは、われわれが霊長類たちをより適確に理解する助けとなるに違いない。もっと霊長類学者を信じてよい、と思う。…

…さらに、このことは対象が人間であっても同様であること、つまり人間を語るとき「擬人主義」もあることに留意したい。人間は必ずしも常に言葉に依存して他者と向き合っているわけではない。人間の相互行為には言葉のやりとりだけでなく、意識的、無意識的な身体を用いた行動…が多分に含まれている。それらを実直に正確に言語的に記述するには、サルたちの行動を観察し記述する際と同様の注意と工夫が必要となるはずなの

である。そもそも言葉の有無に関わらず、他者の行動を理解し表現するという点において両者に本質的なちがいはない。したがって、この問題は人類学と霊長類学の双方にとって協働して取り組むべき共通の課題と位置づけることができよう。

- ・擬人的表現はやみくもに排除すべきものではない？
- ・「やみくもな擬人主義の否定は逆に「二重の擬人主義」に陥る」(竹ノ下 2009、高畑 1994)

擬人主義は類推の上に成り立つ。動物たちの心を知るには類推する以外にない(今西 1972)
→常に「読め」→仮説を立てろ・・・「最後まで仮説かも」(伊谷・塚本・篠原 1996)
唯一の道は長期調査しかない。「見て、見て、待つしかない」(グドール)

ヒトについての擬人法/擬人的表現
他者理解という点において、サル/ヒトに本質的な違いはない。
大村さん「異なる他者のリアリティ」への接近

異文化/社会の人びとについて語るとき、サル屋さん(岩田、座馬)と同じ程度に記述に対してその根拠を示してきただろうか。行動を客観的に、詳細に観察し記録して、その上で他者を語る(記述する)言葉を選んだだろうか。そのとき選んだ言葉がなぜ選ばれたかまで論理的にデータで説明してきただろうか。
フィールドノートに埋もれている大量のデータ。「くずデータ」？

擬人法は人間中心主義か？
サルはアルゴリズムだけではないという前提に立てば、擬人的な表現はひとつの手段？

生態学的、行動学的データをそれ自体で完結するレベルで提示した上で、擬人的表現で記述。
目の前にいるゴリラやチンパンジーという実在を「わかった」という経験
観察から「感じとった」メッセージを記述すべく選択された方法

擬人的な表現は言葉の問題<<パースペクティブ、視線
人間中心主義/脱人間中心主義に連なる問題？

(3) 脱人間中心主義
文化人類学における存在論的転回/多自然主義
脱人間中心主義を標榜・・・実は人間中心主義？
・・・多自然を認めるのは人間。動物(やその他の生きもの)の視点や都合は出てこない

「ジャガーは血をマニオク酒としてみる」(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2016)。

そう言っているのは現地の人びと (シャーマン)。ジャガーの主体性は？

動物 (霊長類) たちを人間に昇格させようという傾向 ex. 類人猿中心主義

「自然」を「人間 (文化)」の側に包摂しようとしているように見える (中村 2019)。

…逆？ 人間は動物である、人間は霊長類の一員

「転回」では自然人類学 (生物人類学) への言及がないし、生態人類学への接近もない。
自然人類学のほうも「転回」にいっさい触れない…

「相手に自分を理解してもらい、互いの視点を尊重していくという実践が必要」(中村 2019)
→サル屋とヒト屋の協働も同じ？

協働のための脱人間中心主義

文化人類学は人間の文化社会の多様性を認める。同じように霊長類たちを認められないか。

「自然と人間の共生」←危うさ cf. 自然内存在 (生態人類)
生態系を構成する要素である人間を生態系の外に置いて二つを対立項にしてしまう

* 自然保護や保全に伊谷さんは冷淡だった。「自然の慈悲」(伊谷 1990) を受け取ることと
「自然が微笑むとき」(伊谷 1993) を逃さないこと。自然に対する謙虚と畏敬。

(4) 文脈/視点

どの文脈で語るか/語りたいか

cf. 生態人類学：文化的存在であり生物学的存在であるヒトというトータルなヒトの理解

フィールド科学である以上、すべてのデータは偶発的。
生身の身体をもって切り込もうとする以上、「私」の経験にすべてのデータが帰属してしまうのは避け難い。でも、同じように調査すれば似たような結果が得られるような調査法？

生物学主義、プログラムされたプロセスをただ辿るヒト観を意味しない。
他者や環境 (自然的/社会的) とやりとり (相互作用) しつつ、行為選択。
生物学的還元も一つの文脈だから否定はしない。
でも、このプロジェクトが目指していることを共有してほしい。

どうしても譲れない部分というものが、サル屋にもヒト屋にもあるだろう。だから、せめて
互いのやり方の全プロセスを知り、理解したうえで、議論に臨む。相互理解のための努力。

* 「文脈」というと・・・

————— 私の同僚と私自身によって研究を進めてきた、ニホンザル、アフリカの大型類人猿、アフリカの狩猟採集民、焼畑農耕民、遊牧民といった対象を、ある一つの視点から、あるいはある一つの文脈にのせて眺めてみたいと思うのである (伊谷 1986 : 350)。

「(共存のための) 平等と不平等」という文脈。

われわれの「文脈」はなにか?・・・具体的にしてく時期に入っているように思う。

ココマデ

4. これまでの私の民族誌記述と今後の展望

- (1) 東アフリカ牧畜民のフィールドと民族誌記述をふりかえる：ヒト屋の視点から①
- (2) 生態人類学の視点と方法：ヒト屋の視点から②

5. おわりに

小川了著『サヘルに暮らす：フルベ民族誌』の書評。

—————あるときは分析的に、またあるときは共感をこめて彼らの行動を追跡し、心の動きにまで注意を払っている (河合 1988)

【文献】

- アスキス、パメラ (1984) 「霊長類学の行方」『思想』 3 : 36-51.
- 伊谷純一郎 (1981) 「心の生い立ち：社会と行動」藤永保/伊谷純一郎/藤岡喜愛/梅本堯夫/麦島文夫著『講座 現代の心理学 1 心とは何か』小学館、98-155 頁。
- 伊谷純一郎 (1982) 『大早魃：トゥルカナ日記』新潮選書。
- 伊谷純一郎 (1986) 「人間平等起原論」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学：アフリカに生きる』アカデミア出版会、349-389 頁。
- 伊谷純一郎 (1991) 『自然の慈悲』平凡社。
- 伊谷純一郎 (1993) 『自然が微笑むとき』平凡社。
- 伊谷純一郎・塚本学・篠原徹 (1996) 『江戸とアフリカの対話』日本エディタースクール出版部。
- 今西錦司 (1972) 『動物の社会』思索社。
- 岩田有史 (2022) 「全体の努力と個体の努力：群れはいかに維持されるのか」河合香吏編『関わる・認める (生態人類学は挑む SESSION 5)』京都大学学術出版会、97-125 頁。
- 河合香吏 (1988) 「小川了著『サヘルに暮らす：フルベ民族誌』書評」『アフリカ研究』 32 : 93-96.

- 河合香吏 (1994)「チャムスの民俗生殖理論と性：欺かれる女たち」高畑由起夫編『性の人類学：サルとヒトの接点を求めて』世界思想社、160-203 頁。
- 河合香吏 (2022)「共存の諸相：他者と関わり、他者を認めるとはどのようなことか」河合香吏編『関わる・認める (生態人類学は挑む SESSION 5)』京都大学学術出版会、303-334 頁。
- 河合雅雄 (1989)『学問の冒険』佼成出版社。
- 黒田末寿 (2002)『自然学の未来：自然との共感』弘文堂。
- 座馬耕一郎 (2022)「離合集散が織り成す集団の動態：ヒトとチンパンジーの社会にみる概日性多相集団」河合香吏編『関わる・認める (生態人類学は挑む SESSION 5)』京都大学学術出版会、237-267 頁。
- 高畑由起夫 (1994)「『性』をいかに語るべきか：少し長い序論」高畑由起夫編『性の人類学：サルとヒトの接点を求めて』世界思想社、1-9 頁。
- 高畑由起夫 (2021)「生まれる、動く、集まる、去る、そして死ぬ：サルたちのマイクロデモグラフィ」大塚柳太郎編『動く・集まる (生態人類学は挑む SESSION 1)』京都大学学術出版会、125-152 頁。
- 竹ノ下祐二 (2009)「ニホンザルのセックス：同性愛行動から見えてくる『能動的受容性』」奥野克巳・椎野若菜・竹ノ下祐二編『セックスの人類学』春風社、3-37 頁。
- 田中二郎・掛谷誠編 (1991)『ヒトの自然誌』平凡社。
- 中村美知夫 (2019)「『人間』と『もの』のはざままで：『動物』から人類学への視点 (パースペクティブ)」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学 2』京都大学学術出版会、259-278 頁。
- 西田利貞・伊沢紘生・加納隆至編 (1991)『サルの文化誌』平凡社。
- 夏原和美 (2022)「栄養生態学からみた人との関わりと子どもたち：近代化過程にあるパプアニューギニア東高地州におけるフードシェアリング」河合香吏編『関わる・認める (生態人類学は挑む SESSION 5)』京都大学学術出版会、127-163 頁。
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ、E. (2016)「アメリカ先住民のパースペクティヴィズムと多自然主義」『現代思想』44 (5)：41-79.
- 山内太郎 (2022)「狩猟採集民の子どもはどのようにして大人になるのか：育児協働と子ども狩猟採集活動」河合香吏編『関わる・認める (生態人類学は挑む SESSION 5)』京都大学学術出版会、63-93 頁。
- 渡辺茂 (2019)『動物に「心」は必要か：擬人主義に立ち向かう』東京大学出版会。

【目次】

1. はじめに：経緯と課題
- 1-1 経緯
- 1-2 課題

2. 人類学と霊長類学の協働

- 2-1 進化という文脈
- 2-2 伊谷純一郎の「直観」
- 2-3 ヒトを見るようにサルを見、サルを見るようにヒトを見る

3. 行動への着目

- 3-1 観察と記録
- 3-2 擬人法/擬人的表現
- 3-3 脱人間中心主義
- 3-4 文脈/視点

4. これまでの私の民族誌記述と展望

- 4-1 東アフリカ牧畜民のフィールドをふりかえる：ヒト屋の視点から (1)
- 4-2 生態人類学の視点と方法：ヒト屋の視点から (2)

おわりに

質疑応答・議論：

(マルチスピーシーズ民族誌)

- 「脱人間中心主義」への言及のところで、ヴィヴェイロス・デ・カストロ (以下 VdC) の議論が代表的なものとして取り上げていたが、脱人間中心主義の議論もさまざまな展開がある。例えば、「脱人間中心主義」の例としてコーン『森は考える』があるが、コーンはパースペクティヴィズムを踏まえながら、現地の人々がどのように述べているかだけでなく、パースの記号論を用い森の動物がどのように「思考」しているかについて書いており参考になるのではないか。
 - 文化人類学における「存在論的転回」では自然人類学への言及がないという指摘があった。マルチスピーシーズ民族誌がこの「転回」の中に入っているとすれば、マルチスピーシーズ民族誌の 2010 年の *Cultural Anthropology* での特集の中でアグスティン・フエンテスという霊長類学者が文理融合的な調査からバリにおける人間とサルの関係について執筆している。マルチスピーシーズというと日本ではポストヒューマン哲学や思想のイメージがあるが、生態人類学や霊長類学との連携につながりそうな研究も出てきている。
- 近藤祉秋さんらの著書『食う、食われる、食いあう：マルチスピーシーズ民族誌の思考』の序章に、ここ 10 年ほどのマルチスピーシーズの研究のまとめが書かれており、議論の参考になるだろう。

（「許す」ということ）

- 「許す」というのは高度な社会概念であり、擬人的な表現だろう。無視と許すは同じなのだろうか。屋久島のニホンザルを観察している際に、遠いところで2頭のオスザルが私たちに背中を向けており、同行者が「ほらほら、無視しているよ」と言ったことがある。なぜ無視しているとわかったのだろうかと思ったが、そのうちの1頭が一瞬こちらに振り向いた後、ふっと前をむくことがあった。「そうか無視しているのか」と感じた。
- ドドスの集団間関係を敵対/非敵対で考えてきた。しかし、無視・許容・黙認などその間にもいろいろな関係のありかたがあるだろう。

（擬人的な表現）

- 西田利貞ら訳の『大型類人類の権利宣言』（パオラ・カヴァリエリ、ピーター・シンガー編）では、擬人的な表現が多く使われていた。擬人的な表現の力、それを使わないと与えることができない説得力がある一方で、科学的な文脈ではその表現は使用しにくいという、アンビバレンスなものがある。
- 今回紹介した『生態人類学は挑む』の霊長類学者の論考は、生物学の論文として完成したものであるにもかかわらず、擬人的な表現も使われておりポジティブな驚きがあった。今回紹介した霊長類学者の論文は、フィールドの印象をより正確に表現しようと追及する方法として、擬人的な表現方法をとったのではないだろうか。
- 初期の霊長類学に対する批判は、心理学の立場からの批判が主だった。心理学系は個体に名前をつけることも擬人的であるとみなし、番号をつけていた。
- 人類学の一分野として霊長類学が進化を考えてきた以上、参照するものが人間であるため擬人的な記述をすることは原理的に不可避であるのではないか。
- 擬人的な表現の仕方について、複数のものがあり、整理をする必要がある。一つは定義されたものであり、動物学のなかでは、擬人的な言葉を定義した上で使用する場合がある。例えば、ストラテジー、和解、文化などがこれに当てはまる。もう一つは、純粋に表現上のものである。これは、事実を描き、「この事実をみた私はこう解釈しました」というものであり、この解釈がすべてであると言っておらず、少なくともこの事例をみてこういうふうに解釈したというレベルのものである。

（擬人的な表現と観察対象：ニホンザル、類人猿、人間）

- 私はニホンザルの研究をしているが、できるだけ擬人的な表現は避けている。類人猿の研究者は擬人的な表現をよく使用するかもしれない。観察対象により、表現が異なる可能性がある。
- ニホンザルに関して書かれた文章で擬人的な表現を見つけるとどうしても擬人主義に思えてしまう。一方で、類人猿は実際に人間に似ているので、切り分けが難しい。実際に似ているのと、擬人主義と分けるのは難しいが、類人猿研究者はしなくてはならないのでは

ないか。

- 擬人的な表現をする場合、擬人的な表現のベースとなった観察が示されていると、その人がどのような行動を擬人的に表現しているのかがわかる。

→人間を対象にしてきたなかで、その言葉を用いた理屈について表現してこなかった。人間を対象にしたとしても、紹介した霊長類学者の論文（岩田・座馬）のレベルで記述することが大切なかもしれない。

（勝手な解釈問題）

- 擬人主義はもっと大きな問題のうちの 1 つである。勝手な解釈問題というのが一番大きな問題である。
- 20 年ほど前から文化人類学分野において、オートエスノグラフィというものがでてきた。オートエスノグラフィとは、自分自身が経験したことを、自分自身の語りを通し表現したものである。私たちは他人（サルも含む）のことを書いているが、究極的には他人のことはわからない。では、自分のことならわかるだろうか。オートエスノグラフィを想定しながら、この議論をすると面白いだろう。オートエスノグラフィの記述を読むと、パフォーマンスで、繰り返しが多く、事実を伝えるエスノグラフィではない。自分について書く際にもやはりフィルターを通してしている。
- 「私は森に行ってサルをみた」というのは、一種のオートプライマトロジーである。また、「私が感じた/思った」というのはデータに基づかないオートプライマトロジーである。一番気をつけないといけないのは人間の思い込みである。
- 数字を使用することで、安易な擬人主義をさけうるのではないか。例えば Aさんと Bさんで「今日は、あたたかい」と言った際に、感覚が異なる場合がある。数字で計測すると、一定の客観性がえられる。

（客観性について）

- 「客観性」には歴史があり、19 世紀にカメラの登場とともに広まった概念である。最近では、シミュレーションや統計の発達に伴い、客観性よりも専門性が重視される。そのデータをどう見るかが、客観的な判断よりも重要となってきた。観察の場で、目の前で起きていることはこういうことだとわかるということは、見ている人の直観に依存している。新しい人はトレーニングを積んだり、詳しい人に教えてもらったりすることでみえるようになる。
- 半分そうで、半分そうではない。見ればわかるものもあるし、経験を積むことでわかることもある。難しいのは前者の方で、われわれ人間とサルの近さにある。例えば、サルの悲鳴をきくと、そのサルがどのような心理状況にあるか私たちには想像できる。データを取得せずともわかった気になるが、やはりサポートするデータが必要である。
- 人間では、「自分と同じだ」とわかったと思っていたことが、まったく間違えているとい

うことがあるが、サルではどうか。

→データ分析をしたら、印象と全く異なっていたということはある。ある特定の事例に印象がひきずられているということがある。データをシステムティックにとることで、後から気づくこともある。

(文化人類学と霊長類学の方法論の共通性)

- 文化人類学も霊長類学も「フィールドに行き観察する」ことは大事である。「参与型観察を行っているのは同じである」と宣言してもよいのではないだろうか。たしかに、参与観察は主に人間の手法であり、サルは参与させてくれない。しかし、共通点はその場に一緒におり、共に見ている、音声をきいているということである。
- ニホンザルの観察をする際に、一緒にいることは「許されている」のではないか。サルと毛づくろいや交尾はしなくても、一緒におり移動できるのであれば、そういう「参与」のかたちもあるようにも思える。大村さんの話を敷衍すれば、そのような「社会性」が現れていると言えるのではないか。
- 個体追跡法は文化人類側では難しいという話はよく議論されていることだが、時間軸上で「Aさんの1日」という風にデータを書くことはあるだろう。つなぎ合わせて、1日を再構成することはできるのではないか。当然大きくちがうのだが、時間軸上で、サルとの比較は十分可能なのではないか。

(以上)